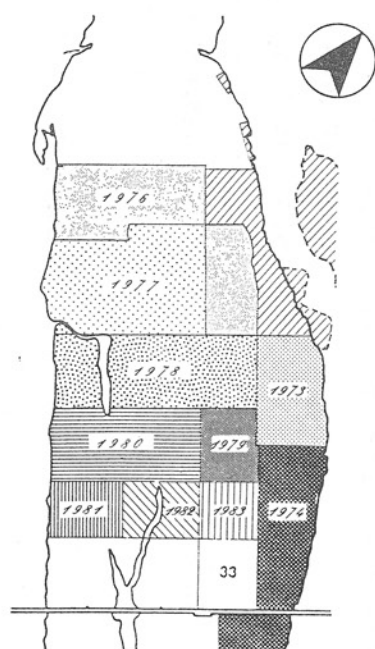


広島・草戸千軒町遺跡 くさどせんげんちょう

- 1 所在地 広島県福山市草戸町
 - 2 調査期間 第三三次調査 一九八四年(昭59)二月～一月
 - 3 発掘機関 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 - 4 調査担当者 代表 松下正司
 - 5 遺跡の種類 集落跡
 - 6 遺跡の年代 平安～江戸時代(中心は主として鎌倉・室町時代)
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 第三三次調査区は遺跡包蔵中洲中央部東側に位置し、一九七四年度実施の第一三次調査区の西、一九八三年度実施の第三二次調査区



第33次調査区位置図

の南にあたり、東西三〇m×南北四〇mの二二〇〇㎡である。

今回の調査区では、SD一三七五・一八二〇溝等の北から延びて鎌倉時代の町の東限を画してきた大規模な南北溝群が終結しており、町の東端部の様相を明らかにできた。また室町時代のSA二九八〇・二九八一柵、SD六三五溝等を検出し、柵と溝による大規模な町囲ないし町割が広がっている様相が明らかになり、町の構造を確認する上で大きな成果を得ることができた。

ただ調査区南東部では遺構が殆ど検出されなかったが、この地区では表土を除去すると、無遺物層である砂層が湧水砂層まで厚く堆積しており、生活空間として適さない場であったと考えられる。

墨書木札類は板塔婆・柿経・標柱類等が、SG六四〇・三〇六〇池等から出土している。

SG六四〇池 調査区北東部に位置するもので、第一三次調査区から続く。今回東西約一m、南北約一八m、深さ一・一mを検出し、全体では東西約一七m、南北約一八mの規模になる。江戸時代のもので、第一三次調査区ではこの池の東北部から北・西へ向けて溝が延びており、当該期の中洲中央部東側の様相を考える上で注目される遺構である。

SG三〇六〇池 調査区南西域に位置するもので、東西約一五m、南北約二五m、深さ一・〇～一・六mを検出し、更に西(第三四次調査区)・南(未調査)へ延びる大規模な池である。南半部はSX三

今回出土した墨書木札類については、現在整理・検討中であるの

今回出土した墨書木札類については、現在整理・検討中であるので、主なものを記すにとどめる。

(1)

慈力
得大

(2)

「南無六道」
南無六道
(411) × 49 × 5 170

(3) $\begin{array}{|c|c|c|c|} \hline \square & \square & \square & \square \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{|c|} \hline \text{四力} \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{|c|} \hline \text{六力} \\ \hline \end{array}$ $\begin{array}{|c|} \hline \text{道} \\ \hline \end{array}$ $(284) \times 54 \times 6$ 170

(4) 大薩埵 $(304) \times (54) \times 8$ 170

(5)

●

□	貞	
□		
□		
□		
□		〔北方〕
□		〔方力〕
□		
×		
□		
□		

元 辺 力 金 剛 力
 (287) × 32 × 17 195

(6)

□の□ミ□しと□□□に□□なく

● {そカ}

[illegible]

へう□□の□^[か]×□くふの□□

もん□□□□ちや□□□□□□ $264 \times 35 \times 5$

180

(7) \square 永禄 \times \square $\left[\begin{smallmatrix} \text{季} \\ \text{力} \end{smallmatrix} \right]$ $(120) \times (23) \times (4)$ 197

(8) $\begin{array}{|c|c|c|} \hline \square & \square & \square \\ \hline \end{array} \left[\begin{array}{c} \text{永} \\ \text{力} \end{array} \right]$

表土

(9) $\begin{bmatrix} \square & \square & \square \end{bmatrix}$ 般若 \square 波羅蜜多 \square $(130) \times 14 \times 1$ 172

(1)・(5)は細い丸太材の必要部分を平らに削って墨書しており、(5)は両端部とも欠損しているが、(1)は下端部を尖らしており、地中に立てたとも考えられる。当遺跡からは同様のものが第一三次調査のSD六二〇溝から出土しており、墓標・供養碑等の標柱類と考えられる。

(2)・(3)・(4)は板塔婆で、(2)は頭部を五輪形に、(3)は圭頭に整え、(4)は下端部を尖らしたものである。何れも長期間外気に触れていたものらしく、文字の部分が浮かび上がっており、(3)は墨痕が全く残存していない。

(6)は破損した折敷片に墨書したもので、記述を材の面内におさめるために、片面の左側の行の字は随分小さくなっている。

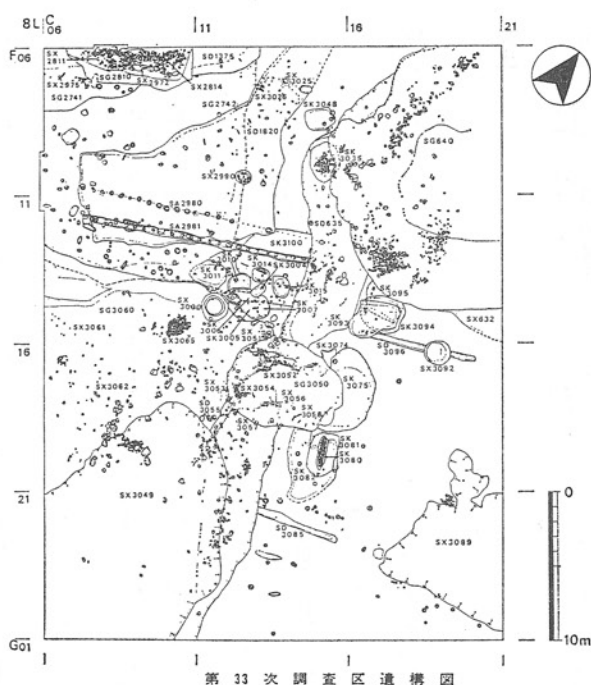
(7)は板塔婆の断片とも考えられ、異体字で永禄四年(一五六一)が記されており、当遺跡で紀年銘のある遺物は、第一五次調査のSD七六〇溝出土の明応二年(一四九三)銘の板塔婆に続いて二例目である。

(8)は断片、(9)は柿経である。

この他に墨書木製品として、鎌倉時代のSG二七四一池から、四・八cm、三・四cm、〇・五cm、三・三cm間隔で線を引いた物差状木製品が出土している。

9 関係文献

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡―第三三次発



掘調査概要―』(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報一九八四 一九八六年刊予定)

下津間康夫「草戸千軒町遺跡第33次調査概要」『草戸千軒』No. 140 一九八五年

同「草戸千軒町遺跡一九八四年度出土の主要遺物」(同右No. 143 一九八五年)

(下津間康夫)